

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

[illegible]

6. 拠点形成の目的・必要性

I. 20世紀後半から始まったグローバリゼーションと呼ばれる地球規模での瞬時情報伝達社会の到来は、その一元化への基盤となった科学技術の進歩さらには政治経済的な変化をも加えて、地域を問わず現代世界にいきる人びとの生活様式を大きく変え、人間の生に対する意味づけ、さらには価値観にも激しい転換を迫っている。いな、その転換はいたる所でしみを伴い、無数の人びとがうめき声さえあげつつある。

世界規模でみられる以上のような人類社会の大きな変容は、歴史学、哲学、文学を中心に、人間が個人としてまた集団としていかに合理的な行動をとるか、さらには尊厳ある生を営むことができるかという、人の思想、文化、行動の意味を時間軸と空間に沿って考えてきた人文学のあり方にも、新たな課題を提示し、従来の地域限定的研究方法への反省を生み出す。約言すれば、グローバル化が世界を時間的に狭め、政治経済の動向、人々の意識が瞬時に連動しあうものとなりつつあるとき、人文学もまた自身の視野を広げ、「地球市民化」というこれまで希薄であった新たな人間理解を、研究の中心的視座に加えなければならない。個別性を持つ地域社会に係わる研究、あるいはそこでの文化主体を分析対象にすえた既往の研究を否定する必要はない。しかし、そうした個別研究を全体に結びつけ、地球規模で人間存在の諸相を総体として理解し、文化的に豊かな人間のあり方を人類として展望する総合的な人文学的知を確立する必要があるのであり、しかもその総合を基礎として、今日のグローバル化の波で苦闘し煩悶する、人間の生き方の多様性あるいは文化の多元性を意義づけていく努力が求められているのである。おそらくそこでは自由と寛容の精神の新しい位置づけが、基礎的条件となるであろう。

II. 本プログラムは、現代世界が求める、そうした総合的で国際的展望を持つ人文学的知の形成という課題に、歴史学、哲学、文学という人文学の基礎的3分野を有機的に結びあわせつつ、挑むことを最大の目的とする。研究の上ではいずれの分野でも歴史時間軸に沿った実証的研究を基礎とする。人類の歴史を通してみると、複数地域の人々の生活基盤が結びつくという意味の広域的集合化は、繰り返し各地域にさらには大陸規模で起こってきた。しかもその集合化に共通してみられたのは広域的な結合がもたらす政治権力や支配文化のもたらす一元化と、地域社会・文化の多元性との対立する過程であった。ただ同時に、長い時間を通してみると、そうした一元化と多元性が複雑に融合

しながら新しい社会様式、文化を創り出していく過程をも検出できる。

本プログラムは、人類史にみられたそうした一元化と多元性の葛藤と変容という切り口を通して、広域的集合化がたどる歴史的、文化的、思想的変化の過程と、その変化に潜んだダイナミズムの解明を目指す。過去の広域的集合化の厳密な実証的解明を通して、今日複雑な対立や亀裂にゆがむ現代世界の直面する思想的課題、また文化的問題の歴史的起源、さらには今日の意義を探るとともに、さらに進んで、人類が絶えず希求してきた「調和ある多様性」の基盤を明らかにすることを目指す。その2つの探求は、グローバル化する現代世界に向き合う人文学の固有の課題であるばかりか、グローバル化の基盤となった自然科学分野の進歩を人類の福祉につなげていく人間理性の再構築という、人類社会が抱える大きな課題に対して人文学として独自の貢献を果たす試みでもある。

III. 本プログラムは、京都大学文学研究科の歴史文化学専攻を軸とし、それに他の4専攻（思想文化学・文献文化学・現代文化学・行動文化学）の活動を緊密に絡ませることを通して、上述した現代世界の人文学的課題に挑み、さらには人文学における世界的研究教育拠点の形成を図ろうとするものである。

京都大学大学院文学研究科は明治39年に創設されたわが国国文学研究の総合的拠点として、すでに今日まで研究教育上の多くの実績をあげてきた。本研究科の特色は、文献、とくに史資料に対する厳密な実証主義にある。その豊かな実績を新しいプログラムに生かしていきたい。くわえて、研究科が取り組もうとする新しいCOEプログラムは、その計画実施が国際的共同研究にも及ぶことから、本研究科を訪れる多数の人々を含めて外国人研究者にも大きな刺激を与え、世界的連鎖を生み出すであろう。

本プログラムの成果は、教育面においても顕著に現れることを期待する。人文学分野において本研究科が輩出した人材は、現在、日本の相当数の高等研究教育機関において中核部分を構成するばかりか、海外高等研究教育機関においても重要な地位を占めている。本プログラムの実施を通して文学研究科が目指す研究教育のいっそうの高度化は、より質の高い研究環境や創造的研究機会を若手研究者に提供し、彼らの研究意欲にみずみずしい活気を与えるばかりか、国内外の学会に参加する彼らの活動にも貴重な財政的支援となる。その成果は外国人留学生を含めた若手研究者の育成に大きな意味を持つであろう。

7. 研究拠点形成実施計画

I. 本プログラムは、「拠点形成の目的」に記すとおり、グローバル化する現代世界に渦巻く一元化と多元性の相克という問題を、歴史学・哲学・文学の分野から歴史的アプローチを用いて解明し、さらにはその成果の総合化を通して、地球規模での人間社会の多様性を位置づけるとともに、「調和ある多様性」の基盤となる条件、とくに自由と寛容を基礎とする人文学知の構築を目指す。

II. 課題の国際性から、プログラムの実施各段階で外国人研究者を積極的に招き、計画全体を国際的共同研究に発展するよう企画する。また、年次をおった研究計画では、上記3分野で次のような個別プロジェクトを全体課題にそくして立ち上げる。

1) 歴史学系プロジェクト：グローバル化時代の多元的歴史学。このプロジェクトは、19世紀以来、個別地域を対象として歴史像を描こうとしてきた既往の歴史研究を見直し、新たな世界史像の構築を目指す。現代世界のグローバル化は、歴史学の分野でもこれまで認識しきれなかったローカル、リージョナル、ナショナルといった多様な動きの同時的発生、またエスニック・アイデンティティという問題を浮上させている。そうした現状理解から、まず「多元的アイデンティティと歴史学」をテーマに、従来の歴史理解と方法論の再検討を行う。引きつづき世界史各時代における世界観を絵図・地図などをも資料に用いて検討し、さらに帝国と呼ばれる組織・秩序の解明を進める。帝国秩序が生み出す求心性の解明とともに、その下での地域の多様性と変容を検討課題とする。地域間の交易や文化交流の実態解明をも目指す。

2) 哲学系プロジェクト：多元的世界と哲学知。このプロジェクトは、グローバル化する現代世界を認識の基底に据えた上で、多元的世界をその総体において思想的に捉えようとする哲学および哲学史的試みとして企画する。そうした思想上の試みは、まず現代社会に生きるわれわれ自身を相対化し、科学的知の人間存在にのっての意味という根本的問題の考察を必要とする。科学知・科学技術が内包する一元性の再検討を進める。その上で、われわれが生きる一元化と多元性が葛藤する世界をその核心において把握し、多元性の歴史的経緯と、一元化が内包する問題点を哲学知の立場から明らかにすることによって、将来への展望を開こうとする。

3) 文学系プロジェクト：文学と言語にみる異文化意識。このプロジェクトは、文学・言語分野に特化し、

文学の表現、文学・言語理論を統合した視点で「異文化意識」を具体的に検証することにより、一元化と多元性が生み出す問題を文化的に深く把握することを目的とする。知られるように、文学・言語の分野でも人類の歴史は、一方で、文化的共同体の形成拡大という一元化への波を、地域的に繰り返してきた。しかし他方で、その一元化に抵抗する動きも絶えずみられた。本プロジェクトではそのような歴史的経緯を認識の基礎として、文学・言語世界において、「異」とはなにか、「同」とはなんであったかを検討する。その上で、「異」なるものの解釈、さらには受容の過程を解明する。

III. 以上、IIに記した個別プロジェクトは、本プログラムのいわば基層研究プロジェクトであるが、それらについては、次の年次計画で作業を進める。1) まず平成14年度から15年度では、各領域における問題点の明確化と分析に主眼をおき、そのための個別研究班の立ち上げ、分野別シンポジウムの開催、さらには知見の豊かな外国人研究者の招聘を積極的に進める。研究班は15ほどを準備する。2) 16年度は計画全体の中間段階とみなし、3プロジェクトのすべてにおいて中間報告書の公刊を目指す。他方、基層プロジェクトと平行して、グローバル化時代の意義を人文学の立場から総合的に明らかにする研究にも着手する。とくに平成16年度には、その成果を中間的に総括するものとして領域横断的シンポジウムを「行動空間の多様性」というテーマにおいて行う。さらにこの間、国際的連携の拡充をめざし、また若手研究者を非常勤研究員として雇用するなどの研究支援体制を構築する。

IV. 本プログラムは、上記基層プロジェクトを一方で立ち上げ、個別研究の深化を図りながら、他方、それらの総合化にたえず関心を払い、全体として地球規模での人間社会の「調和ある多様性」を明らかにする人文学的知の構築を目的とする。このため17年度と18年度をその総合作業に集中的に当てる。3プロジェクトで得られた多様な知見を交換しあい、グローバル化する現代世界の一元化傾向の歴史的背景・経緯を社会的、思想的、文化史的に解明する一方、多元性の基礎や意義を総合的に分析することが、計画中期以降の目標となる。その趣旨で、平成18年度には領域横断的研究会を開催するほか、グローバル化時代の多元的人文学のあり方を書物として世に問うことを目指す。

なお、以上の計画実施のあいだ、事業推進担当者また若手研究者の、関係する国際学会への派遣を積極的に推進し、研究者層全体に及ぶ国際化を図る。

8. 教育実施計画

I. 大学院教育体制の高度化

本プログラムは、世界を視野に入れた人文学の教育拠点形成の基盤が、広い意味での大学院教育体制の高度化と多様化のうえに築かれるべきものと理解する。そのため、プロジェクトに係わり内外の優れた研究者を数多く講師として招き、大学院授業（講義・演習）のこれまでにない国際化を図る。その他、海外の優れた高等教育機関において取得した単位を本研究科の単位として積極的に認める方針をとり、大学院生の国際的交流を拡大する。さらには、異なる専門分野の授業についても、学生の受講をこれまで以上に求め、人文学に関する広い視野をうる機会を確保する。他方、本研究科の特徴を最大限に発揮するものとして、とくに歴史学さらには文学領域では原資料そのものを処理する研究の衰退が懸念される現況に鑑み、原本に対する知識やその扱い、文字解読や校訂技術の組織的継承に留意するプログラムを組み、人文学の基礎訓練を飛躍的に高度化する。教育面での中期的目的は、国際的水準からみても独創的な博士学位論文の完成を数多く促す点にあるが、そのための支援体制充実も本プログラムの計画である。そのための具体的方策は以下に記す。

II. 研究会の組織

優秀なPDを非常勤研究員として3年任期で採用し、それぞれに新領域の開拓を促すとともに、年間10回程度開かれる各研究班主任の研究会の運営にも、重要メンバーとして参加させる。（各年度総計20人の非常勤研究員を採用予定）。また大学院生も、リサーチ・アシスタントとして共同研究に参加させ、彼らの成果を研究会で発表させる。大学院生およびPDが参加する以上の研究会では、分担課題を持たせることによって国際的共同研究に資する知識の習得を促す一方、若手研究者自身の独創性の開拓を最優先する。たとえば、歴史学系プロジェクトに組み込む一研究会では、各地域の絵図・地図を事業推進担当者とともに収集しながら、各地域毎の特色の分析については、若手研究者がそれぞれにあたるシステムを採用する。

III. 国際学会での報告の促進、および現地調査への参加など

大学院生、PDを国際学会に積極的に参加させ、彼らの発表を経済的に支援する。また本プロジェクトのもとで行われる史資料調査、現地調査・発掘、セミナー参加あるいは共同研究に係わる打ち合わせなどに、大学院生、PDを参加させ、多様な経験を積みながら組織的な調査の方法、あるいは海外研究者との共同

研究のあり方などを学ばせる。加えて、異なる専門分野の調査にも積極的に加わることを求め、他分野に対する幅広い知見や視野を修得させる。そうした調査、セミナー参加等への参加費用を補助する。

IV. シンポジウムおよび展示などの企画

研究成果公表の場であるフォーラムやシンポジウム、さらには附属図書館などでの展示を準備する作業において、非常勤研究員のみならず、他のPD、また大学院生の参加を広く求める。

とくに、本計画の後半時期（平成17年度、18年度）に予定する領域横断シンポジウムの準備は、それらに先立つ数回の研究会とともに、若手研究者の教育において重要な役割を果たすものと位置づける。すなわち、領域横断シンポジウムの準備過程は、第一義的には本プログラム事業推進担当者が研究活動の統合を図る場であるが、若手研究者にとっても、個別の研究をこえて現代世界が求める人文学的知の意味を考える重要な訓練の機会となる。その趣旨で、若手研究者に対して、個別分野における専門研究をこえて領域横断シンポジウムへの積極的な発言、とくにその企画準備への参加を求める。

V. 実践的な語学訓練の導入など

以上の教育計画全体の実施に際してとくに重視するのは、あらゆる機会を捉えて国際的研究活動に参加する行動力と視野の育成である。そのため、実践的な語学訓練を教育計画の一環に組み入れることによって、日本語以外の言語での口頭発表の機会、論文執筆機会を増やすよう指導する。さらには、若い大学院生またPDに対して、海外高等研究機関への留学を積極的に推進する。その他、個別の研究面ばかりか、世界認識においても、国際社会にたえず目を向ける研究者であるよう育成する。

9. 研究教育拠点形成活動実績

①目的の達成状況

1)計画全体の目的達成度

本プログラムは、その立ち上げ以来、3つの基層プロジェクトを支える15の研究班を基礎に活動してきた。研究班の名称は以下の通りである(班番号は通称)。歴史学系プロジェクト(上から順に第11班から15班)

「15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観」班

「東アジアにおける国際秩序と交流の歴史的研究」班

「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」班(平成16年4月以降「ヨーロッパにおける人文学知形成の歴史的構図」へ移行)

「王権とモニュメント」班

「帝国システムの政治・文化的比較研究」班

哲学系プロジェクト(第21班から24班)

「現代科学・技術・芸術と多元性の問題」班

「規範性と多元性の歴史的諸相」班

「多元的世界における寛容性についての研究」班

「新たな対話的探求の論理の構築」班

文学・言語学系プロジェクト(第31班から36班)

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」班

「極東地域における文化交流」班

「古代世界における学派・宗派の成立と〈異〉意識の形成」班

「文学と言語を通して見たグローバル化の歴史」班、

「『翻訳』の諸相」班

「言語と論理における普遍性と個別性」班

以上15の研究班は、専門分野を2つもしくは3つ以上にわたって横断する、学際的テーマをもとに組織した。たとえば、歴史上、地図(とくに世界地図)作製が盛んとなる15・16・17世紀という時代を切り取り、世界のそれぞれの地域の人々がどのような世界観を抱いて、その初期近代という新しい時代に向き合おうとしていたかを分析したのが第11研究班である。そこでは、地域史を世界史に総合化してみる広い視野が必要であったし、さらには歴史研究と地理学・地図研究、また哲学史の結合が必要であった。第15研究班についても同様のことが言える。帝国と呼ばれる歴史的政治組織の秩序形成のあり方を広域的かつ比較史的に分析することを目指したこの班の活動には、西洋、東洋をこえた幅広い知識をもつ、政治史から文化史までの研究者が集った。

そうした視野を広げた共同研究に取り組む過程は、集った研究者の間でも問題意識のずれが当初みられるなどすべてが順調ではなかったが、5年の経験をへて歴史学、哲学、文学いずれの分野においても、文化のあ

り方をより複眼的に、さらには狭い専門領域をこえて多面的にみる関心が着実に浸透した。とくに、各自のテーマをより広い視野に位置づけること、また共同研究の討議を通じて新しい課題を発掘するなど班活動がもたらした刺激は大きかった。研究班の活動を基礎に著書として35点におよぶ研究成果を刊行し、またそれらを総合して編んだ紀平英作編『グローバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて』(上下巻、京都大学学術出版会)を刊行した。(本プログラムの成果詳細は学術誌『人文知の新たな総合に向けて』第5回報告書・別冊、京都大学文学研究科刊、2007年を参照)。いずれの成果も高い国際的評価を受けており、世界的研究教育拠点の形成に寄与するものであった。



成果の一部

教育研究活動面での国際的連携、また若手研究者をくわえた国際的共同研究体制の整備も確実に進展した。5年の計画期間を通して、海外からのべ約150人におよぶ研究者をシンポジウム、研究会での報告、さらには講演等で招いた。他方、延べ80人におよぶ本研究科教員、COE研究員・大学院生・ODを海外に派遣した。海外で行われたシンポジウム・学会での発表にくわえて、海外資料・フィールド調査が主であったが、5名の教員については3ヶ月から5ヶ月の海外出張を通して海外研究者との共同研究の実施を支援した。

機関相互の間で交流協定を結んだことも重要な成果としたい。協定は、共同研究態勢を機関を通して整備すること、大学院学生の相互派遣をおこなうこと、および定期のシンポジウムをもつことを内容とした。パリ第7大学、中国の北京大学歴史学部・同大学院と協定を結んだ(それぞれ平成16年、17年より)。

平成18年9月、ケンブリッジ大学において開催した同大学哲学部および古典学部と本研究科との共催シンポジウムKyoto-Cambridge International Symposium

"Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy"は、その成果がとくに大きかった点で特筆しておきたい。ケンブリッジ大学を中心に7名の海外研究者と、同数7名の本学教員がスピーカーとなったこのセミナーは、イギリスで行ったこと、聴衆、司会者、討論参加者にも多くの海外研究者が加わった点など、今後の本研究科が進める国際的活動の1つのモデル的会議であった。全体参加者は70名を超えた。

以上の大学との交流のほかにもサント・ペテルスブルク大学東方学部と学術交流の協定を結んだ（平成17年末）。その他、将来の合同シンポジウムに向けて話し合いを始めた海外大学も多く、この面でも予想を上回る成果であった。

2) 人材育成面での成果と拠点形成への寄与

最大の成果は、博士学位の取得者数が着実に増加した点である。平成14年度（プログラム開始年）から18年度末（終了年度）にいたる、京都大学文学研究科における博士課程学位取得者の数字を示す（行動文化学専攻心理学専修での学位取得者はのぞく）。平成14年度、23名。15年度、28名。16年度、39名。17年度、36名。18年度、40名。質も、この間の学位論文のいくつかが学術書として公刊されていることが示すとおり向上した。朴宣美（平成16年3月学位取得者）『朝鮮女性の知の回遊——植民地文化支配と日本留学』（山川出版社、平成17年刊）などは、その一例である。

そうした学位取得者の増加が、若手研究者の活発な研究班活動への参加、また海外学会での報告・海外調査機会の増加によるものであったことは、間違いない。事業実施期間中、プログラムが支援した若手研究者の海外学会での報告および海外資料（もしくはフィールド）調査は、のべ人数で前者10人、また後者は95人を数える。

若手研究者の人材育成として、外国語での論文発表を支援したこともあげる。京都大学文学研究科は平成18年度、欧文学術誌*Humaniora Kiotoensia*を発刊した。2部構成とし第1部を教員、第2部は大学院生・ODを中心とする若手研究者の部とした。論文Hiroyuki Hashikawa, "The Armenian Element in Early Byzantium: A Prosopographical Perspective"をはじめとする10名の論文を掲載している。ほかにも、各専門学会誌に欧文あるいは中国文で投稿することを支援した。

過去5年間若手研究員をCOE研究員として雇用し支援したことも、研究活動を基礎的に底上げする事業活動であった。他大学出身者をふくめてこの5年間で雇

用したCOE研究員は50人であった。本プログラムの基本報告書である年次学術誌『人文知の新たな総合に向けて』は、全巻で70篇を超える若手研究者の論文を掲載した。

3) 研究活動面での新たな分野の創成と学問的知見等

新しい分野は、とくに7分野で顕著であった。それらについて平成18年度末、以下の研究論集を出版した。

①『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』（藤井譲治・杉山正明・金田章裕編）

京都大学学術出版会。

②『中国東アジア外交交流史の研究』（夫馬進編）京都大学学術出版会

③『知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開—』（南川高志編）ミネルヴァ書房

④『多元的世界における寛容と公共性—東アジアの視点から—』（芦名定道編）晃洋書房

⑤『ディアロゴス—手探りの中の対話』（片柳榮一編）晃洋書房

⑥『文明十四年三月二十六日漢和聯句訳注』（「極東地域における文化交流」研究班編）勉誠出版

⑦『「ナボコフ訳注『エヴゲーニイ・オネーギン』」注解』（「『翻訳』の諸相」研究班編）

本プログラムが全体計画に関わって獲得した共通の知見についてもふれたい。

世界史において人類文化が保持した重要な認識の1つは、多元性、つまり人びとの文化はそもそも一律でなかったし、一律ではあり得ないという認識であることは確言してよい。ただし、5年のプログラムの間われわれが検討課題としたのは、様々な地域社会・文化が接触や融合を繰り返してきた人類の歴史が、その種の多元性とどのように向き合い、さまた統合のもとで多元性を承認する制度をどのように考案したかであった。

5年のプログラム研究を通してわれわれは、人類史における多元性の理解に関しては、過去においても現代においてもなお曖昧な、多くの揺れ動く思想が存在している事実を解明してきた。それらの知見を本プログラムの最終成果として世に問うたのが、京都大学文学部百周年記念論集、平成19年3月刊行の紀平英作編『グローバル化時代の人文学——対話と寛容の知を求めて』（上下2巻、京都大学学術出版会）である。この共同研究の結論は、あえていえば多様性もしくは多元性を尊重する立場を確認しているが、同時に人類がある調和的な関係を獲得していくためには多元の絶対性を主張するよりも、実は多元そのものを相対化してみる立場であろうと考えている。

4)事業推進担当者相互の有機的連携

京都大学文学研究科の長い歴史でも、歴史学、哲学、文学・言語学、各専門分野のものが本プログラムが掲げるような広い共同テーマのもとに共同研究を組織したのは初めてであった。班活動では、当初問題意識のずれなど運営のすべてが順調ではなかったが、すでに述べたように5年の経験をへて京都大学文学研究科には人文学をより広域的に、また特定専門をこえて広くみる複眼的な関心が着実に浸透した。研究方法や問題関心を相互につきあわせ、事業推進担当者が狭義の専門をこえて新しい研究班を組織した有機的連携の効果は重要であった。本プログラムが終わった段階でも共同研究をさらに継続していく動きがみられる。第11研究班、第21研究班、さらには32研究班などである。

5)国際的競争力ある大学作りへの貢献度

京都大学文学研究科はわが国における人文学研究の拠点であるばかりか、京都大学における人文社会科学研究の中核をなす研究教育機関でもある。今回のCOEプログラム実施をとおして本研究科が進めた国際的な研究教育体制の整備は、京都大学の教育研究体制を発展させる基盤の一つであった。

6)国内外に向けた情報発信

平成14年10月～19年3月まで本プログラムの研究成果として多くの情報発信をおこなった。とくに公刊した成果については、3)にその一部を記したが、全体については本プログラム発行学術誌『人文知の新たな総合に向けて』第5回報告書・別冊にすべての書誌データを記したので、参照いただきたい(著書53冊、シンポジウム報告書6冊)。なお、成果の公刊とともに、本プログラムでは開始時からインターネット上にホームページ「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

(Towards a Center of Excellence for the Study of Humanities in the Age of Globalization)を立ち上げ、事業の内容、研究会・シンポジウムの開催、中間的成果を含めてすべての情報を国内外に発信した。

7)拠点形成費等補助金の使途について

補助金の使途で重点としては、a)研究者の招聘・派遣にあてる旅費・滞在費、b)国際シンポジウムの開催を含む研究集会の組織費、c)研究資料の購入、d)研究員の雇用費、e)成果の公刊に関わる経費の5部門である。これらの使途の決定、必要経費については事業推進担当者6名で構成するCOE実施委員会を組織し、合議の上で決定した。いずれの使途も、本プログラムの運営のために大きな意味を持った。

②今後の展望

計画実施5年以降については、いくつかの検討課題があるが、1つは文学研究科内での学際的、分野横断的研究教育体制を今後も維持拡大することであり、またいま1点は、他大学および海外大学・研究機関との国際的共同研究態勢の整備・拡大である。そのための取りまとめ機関として、既存の専門分野を横断して若手研究員および教員を共同研究のために配置する文学研究科内組織(さしあたりの名称「広域文化研究センター」)が設置できればと希望している。

③その他

以下に引くのは本プログラムに対するオーストラリア・メルボルン大学哲学教授グラハム・プリースト(Graham Priest)氏の外部評価の一節である。

"I have visited the Graduate School of Letters of Kyoto University twice in the last two years, and participated in various academic activities there. In particular, I was invited to speak at some symposia sponsored by the COE Programme; I also taught some graduate classes in philosophy at the Graduate School of Letters....The main objective of the Programme, under the rubric "the Study of the Humanities in the Age of Globalization," to pursue the fundamental question: what role can and should the humanities play at the beginning of the 21st century, as globalization continues to accelerate. The Programme, which was initiated in 2002, has now entered the fifth year of research activities, carried by more than ten research groups. Exploring the frontiers of contemporary humanities research, the Programme has attempted the utmost expansion of the scope of the humanities. It has also aimed at cooperation with leading scientific centers around the world. These objectives and projects have been pursued by the main staff of the Graduate School of letters of Kyoto University, whose reputation as the most distinguished center of higher education and research for the humanities in Japan has long been established. The academic accomplishments of the Programme after years of activity is as excellent as is to be expected from the staff of such a notable institution." 日付Nov. 13. 2006.

ちなみに同様の評価を以下の方々からも受けた。Prof. Harunaga Issacson (インド・ハンプルグ大学、日付2006年11月16日)、牛大勇教授および李孝聡教授(北京大学歴史学部、日付2006年11月8日)。

21世紀COEプログラム 平成14年度採択拠点事業結果報告書

機 関 名	京都大学	拠点番号	D09
拠点のプログラム名称	グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成		
1. 研究活動実績			
①この拠点形成計画に関連した主な発表論文名・著書名【公表】			
・事業推進担当者（拠点リーダーを含む）が事業実施期間中に既に発表したこの拠点形成計画に関連した主な論文等〔著書、公刊論文、学術雑誌、その他当該プログラムにおいて公刊したもの〕 ・本拠点形成計画の成果で、ディスカッション・ペーパー、Web等の形式で公開されているものなど速報性のあるもの ※著者名（全員）、論文名、著書名、学会誌名、巻(号)、最初と最後の頁、発表年（西暦）の順に記入 波下線（~~~~~）：拠点からコピーが提出されている論文 下線（_____）：拠点を形成する専攻等に所属し、拠点の研究活動に参加している博士課程後期学生			
●紀平 英作（拠点リーダー）			
紀平英作（編著書）『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて』上・下巻、京都大学学術出版会、2007年			
紀平英作（編著書）『帝国と市民—苦悩するアメリカ民主政』、山川出版社、2003年			
紀平英作（編著書）『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』、京都大学学術出版会、2004年			
紀平英作（編著書）『京都北京—日中を結ぶ知の架橋』、角川学芸出版、2005			
紀平英作（編著書）『グローバル化と帝国』、ミネルヴァ書房、2006年			
紀平英作（論文）『世界分割の時代を超えて—第一次世界大戦と新たな世界構想の胎動』紀平英作（編）『グローバル化時代の人文学』上巻、京都大学学術出版会、281-311頁、2007年			
●藤井 譲治（事業推進担当者）			
藤井譲治・杉山正明・金田章裕編（共編著書）『絵図・地図からみた世界像』、京都大学大学院文学研究科、2004年			
藤井譲治・杉山正明・金田章裕編（共編著書）『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』、京都大学学術出版会、2007年			
藤井譲治（論文）『一六世紀末における日本人の地理認識の転換』紀平英作編『グローバル化時代の人文学』上巻、京都大学学術出版会、221-249頁、2007年			
●夫馬 進（事業推進担当者）			
夫馬進（論文）『朝鮮通信使による日本古学の認識—朝鮮燕行使による清朝漢学の把握を視野に入れ—』『思想』、pp.4-27、2006年			
夫馬進（論文）『一七六四年朝鮮通信使と日本の徂徠学』、『史林』第89巻第5号、1-33頁、2006年			
夫馬進（編著書）『中国東アジア外交交流史の研究』（京都大学学術出版会）、2007年			
夫馬進（論文）『明清中国による対朝鮮外交の鏡としての対ベトナム外交—冊封問題と「問罪の師」を中心に—』紀平英作編『グローバル化時代の人文学』下巻、京都大学学術出版会、225-252頁、2007年			
●杉山 正明（事業推進担当者）			
杉山正明（単著）『モンゴル帝国と大元ウルス』、京都大学学術出版会、2004年			
杉山正明（単著）『中国の歴史08 疾駆する草原の征服者』、講談社、2005年			
●南川 高志（事業推進担当者）			
南川高志（単著）『海のかなたのローマ帝国：古代ローマとブリテン島』、岩波書店、2003年			
南川高志（編著書）『知と学びのヨーロッパ史：人文学・人文主義の歴史的展開』、ミネルヴァ書房、2007年			
南川高志（論文）『古代ローマ帝国と近・現代ヨーロッパの自己理解』谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』、山川出版社、27-42頁、2003年			
●服部 良久（事業推進担当者）			
服部良久（論文）『13世紀のドイツ北西部における紛争解決と政治秩序』『京都大学文学部紀要』45、61-190頁、2006年			
服部良久（論文）『中・近世の村落間紛争と地域社会—ヨーロッパ・アルプス地方と日本—』『京都大学文学部紀要』46、1-110頁、2007年			
●金田 章裕（事業推進担当者）			
金田章裕（編著書）『平安京—京都』、京都大学学術出版会、2007年			
●伊藤 邦武（事業推進担当者）			
伊藤邦武（単著）『偶然の宇宙』、岩波書店、2002年			
伊藤邦武（論文）『チャールズ・パースの「アガペー主義」』『宗教哲学研究』第23号、16-31頁、2006年			
伊藤邦武（単著）『パースの宇宙論』、岩波書店、2006年			
伊藤邦武（論文）『科学的真理のステイタス—ローティ対テイラー—』紀平英作編『グローバル化時代の人文学』下巻、京都大学学術出版会、305-332頁、2007年			
●氣多 雅子（事業推進担当者）			
氣多雅子（論文）『寛容と対話』『人文知の新たな総合に向けて—21世紀COEプログラム〈グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成〉第 II 回報告書〔哲学篇2〕、京都大学大学院文学研究科、227-253頁、2004年			
氣多雅子（論文）『日本仏教者と平和問題』芦名定道編『比較宗教学への招待—東アジアの視点から—』、晃洋書房、170-193頁、2006年			
氣多雅子（論文）『宗教の多元的状況と仏教』芦名定道編『多元的世界における寛容と公共性—東アジアの視点から—』、晃洋書房、2-18頁、2007年			
●藤田 正勝（事業推進担当者）			

- 藤田正勝（論文）「異文化間の対話（翻訳）の可能性をめぐる」B・デービス編『世界のなかの日本の哲学』、昭和堂、101-119頁、2005年
- 藤田正勝（論文）「哲学史は什麼？——論明治時代哲学史輸入的歴史——」『明治哲学與東亜近代哲學的轉型・國際學術會議論文集』（中華日本哲学会）、39-45頁、2005年
- 藤田正勝（単著）『西田幾多郎——生きることと哲学』、岩波書店、2007年
- 片柳 榮一（事業推進担当者）
- 片柳榮一（論文）「超越論的統覚とコギト・アウグスティヌスの視点から」『京都学派の伝統とカント』、京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の形成拠点形成」、84-104頁、2005年
- 片柳榮一（編著書）『ディアロゴス—手探りの中の対話—』、晃洋書房、2007年
- 川添 信介（事業推進担当者）
- 川添信介（論文）「トマス・アクィナスと無知の知」『アルケー』第11号、21-35頁、2003年
- 川添信介（単著）『水とワイン 西欧13世紀における哲学の諸概念』、京都大学学術出版会、2004年
- 川添信介（論文）「心の哲学」中川純男・加藤雅人編『中世哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、74-90頁、2005年
- 赤松 明彦（事業推進担当者）
- 赤松明彦（論文）「根源の現れとしての文の意味と直観」『哲学研究』580号、1-14頁、2004年
- Akihiko Akamatsu（論文）“Bhartrhari on Meaning and Form”, *Acta Asiatica*, No.90, pp.1-13, 2006
- 赤松明彦（論文）「インドにおける哲学誌の成立とパースペクティヴィズム」『哲学研究』582号、25-41頁、2006年
- 御牧 克己（事業推進担当者）
- Katsumi Mimaki（論文）“Les cinq sciences discutées par un auteur tibétain du 15e siècle”, *Annuaire de l'Ecole Pratique des Hautes Etudes, Section des Sciences religieuses*. Résumé des conférences et travaux. 2004-2005 décembre 2006, tome 113, pp.83-85, 2006
- Katsumi Mimaki and Samten Karmay（共著）, *Bon sgo gsal byed (Clarification of the Gates of Bon), A Fourteenth Century Bon po Doxographical Treatise*, The Graduate School of Letters, Kyoto University, 2007
- 徳永 宗雄（事業推進担当者）
- Muneo Tokunaga（論文）“Recent Studies of the Sanskrit Epics and Purāṇas in Japan (1999-2000)”, *Studies in the History of Indian Thought*, No.15, pp.99-114, 2003
- Muneo Tokunaga（論文）“Buddhacarita and Mahābhārata: A new perspective.”, *Journal of Indological Studies*, No.18, pp.135-144, 2006
- 西村 雅樹（事業推進担当者）
- 西村雅樹（論文）「アメリカの「世紀末ウィーン文化」研究書」、『人文知の新たな総合に向けて 第一回報告書』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム報告書）、27-30頁、2003年
- 西村雅樹（論文）「若きウィーン派と日本」『文学と言語に見る異文化意識』（京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム国際シンポジウム報告書）、47-65頁、2004年
- 西村雅樹（論文）「ヘルマン・バルが分離派「日本展」に観たもの」『人文知の新たな総合に向けて 第二回報告書IV』、145-163頁、2004年
- 川合 康三（事業推進担当者）
- 川合康三（編著書）『和漢聯句訳注』京都大学国文学研究室・中国文学研究室編、臨川書店、2006年
- 川合康三（論文）「和漢聯句の世界」二松学舎大学『人文論叢』77、1-20頁、2006年
- 川合康三（編著書）『漢和聯句訳注』京都大学国文学研究室・中国文学研究室編、勉誠出版、2007年
- 木田 章義（事業推進担当者）
- 木田章義（論文）「両足院本「毛詩抄」とその背景」『林宗二・林宗和自筆毛詩抄』臨川書店、701-736頁、2005年
- 木田章義（論文）「訓読と翻訳—日本書紀の古訓—」『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』、汲古書院、23-45頁、2005年
- 木田章義（論文）「日本漢文訓読史」『東亜伝世漢籍文献訳解方法初探』台北、国立台湾大学出版中心、285-305頁、2005年
- 木田章義（論文）「文字の力」『和漢語文研究』4、京都府立大学、29-47頁、2006年
- 中務 哲郎（事業推進担当者）
- 中務哲郎（単著）『饗宴のはじまり』、岩波書店、2003年
- 佐々木 丞平（事業推進担当者）
- 佐々木丞平（論文）「学の制度と規範—狩野派の「学画」と「質画」をめぐる」『ACADEMICA—学の制度と規範』（シンポジウム報告集）、53-61頁、2004年
- 谷川 稔（事業推進担当者）
- 谷川稔（編著）『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』、山川出版社、2003年
- 内井 惣七（事業推進担当者）
- 内井惣七（単著）『アインシュタインの思考をたどる——時空の哲学入門』、ミネルヴァ書房、2004年
- 内井惣七（単著）『空間の謎・時間の謎』、中公新書、2006年
- 吉田 城（事業推進担当者）
- 吉田城（論文）「プールの草稿研究」『岩波講座 文学 1 テキストとは何か』、岩波書店、145-164頁、2003年
- Jo Yoshida（論文）“Le Martyre de Saint Sébastien et Marcel Proust”, *Marcel Proust 4*, “Proust au tournant des siècles”, Minard, pp.161-174, 2004
- 鎌田 元一（事業推進担当者）
- 鎌田元一・中町美香子（共著論文）「安祥寺資財帳 校訂・釈読」第14研究会編『安祥寺の研究』I、京都大学、31-76頁、2004年
- 鎌田元一（論文）「暦と時間」上原真人他編『列島の古代史7 信仰と世界観』、岩波書店、233-281頁、2006年

②国際会議等の開催状況【公表】

(事業実施期間中に開催した主な国際会議等の開催時期・場所、会議等の名称、参加人数(うち外国人参加者数)、主な招待講演者(3名程度))

「歴史学の現在を問う」

日時：2002年11月30日10:30～17:00、場所：京都大学大学院文学研究科新館第3講義室、参加人数：163(8)、主な招待講演者：ロータール・フォン・ファルケンハウゼン(カリフォルニア大学ロサンジェルス校教授)

「自然という文化」の射程

日時：2002年12月2日13:00～17:00、場所：京大会館101号室、参加人数：217(10)、主な招待講演者：オギュスタン・ベルク(フランス国立社会科学高等研究院教授)、加藤尚武(鳥取環境大学長)

国際フォーラム「ロラン・バルト、多才の人」

日時：2004年1月24日13:00～、場所：関西日仏学館稲畑ホール、参加人数：約150(8)、主な招待講演者：ルイ＝ジャン・カルヴェ(エクス＝アン＝プロヴァンス大学教授)

「空間の行動文化学」

日時：2004年12月4日、場所：京都大学百周年時計台記念館大ホール、参加人数：148(7)、主な招待講演者：ジル・フォコニエ(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)、嘉田由紀子(京都精華大学人文学部教授)

「International Symposium on Conditionals」

日時：2005年1月21日～23日、場所：京都大学百周年時計台記念館大ホール、参加人数：270(14)、主な招待者：Cleo Condoravdi(パロアルト研究所・スタンフォード大学)、ティム・フェルナンド(トリニティカレッジ)、ジェームズ・ヒギンボサム(南カリフォルニア大学)、フランク・フェルトマン(アムステルダム大学)

「近代ヨーロッパにおける人文主義の継承と変容 — 政治文化・古典研究・大学 —」

日時：2005年3月6日10:30～17:30、場所：京都大学大学院文学研究科新館第3講義室、参加人数：120(6)、主な招待講演者：エドヴァルト・オパリンスキ(ポーランド科学アカデミー歴史学研究所)、ヴェルナー・エック(ケルン大学、古代ローマ史・ラテン碑文学)

「絵図地図が語る歴史世界」

日時：2005年3月19日13:00～／3月20日10:00～18:00、場所：京都大学大学院文学研究科第9演習室、参加人数：30(3)、主な招待講演者：劉錚雲(中央研究院歴史言語研究所)、張小銳(中国第一歴史档案館)、劉若芳(中国第一歴史档案館)、郭美蘭(中国第一歴史档案館)

「イメージと解釈」

日時：2005年9月10日～11日、場所：京都大学大学院文学研究科新館9月10日第1・第2講義室／11日第3講義室、参加人数：120(6)、主な招待講演者：ニルス・ビュットナー(ドルトムント大学)、ポール・クラウザー(ブレーメン国際大学)

「プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』とナボコフによる英訳・注釈について」

日時：2005年12月11日14:00～17:00、場所：京大会館101号室、参加人数：約80(4)、主な招待講演者：ジュリアン・コノリー(ヴァージニア大学教授)

「京都と北京：光の交わるところ-学問知から人類知へ」

日時：2005年12月17日、場所：京都大学時計台・百周年記念ホール、参加人数：249(12)、主な招待講演者：牛大勇(北京大学歴史学部)、閻歩克(北京大学歴史学部)、柴新江(北京大学歴史学部)、陳平原(北京大学中文学部)

KYOTO-CAMBRIDGE International Symposium "Integrating the Humanities: the Roles of Classics and Philosophy"

日時：2006年9月25日、場所：Faculty of Classics, Cambridge、参加人数：70(4)、主な招待講演者：デヴィッド・セドレー(ケンブリッジ大学)、リチャード・ハンター(ケンブリッジ大学)、ロビン・オズボーン(ケンブリッジ大学)、ヒュー・メラウ(ケンブリッジ大学)、ニルス・エリック・サリーン(ルンド大学)、ドナルド・ギリース(ロンドン大学)、クリストファー・ギル(エクセター大学)

「多元的世界における宗教的寛容と公共性 — 東アジアの視点から」

日時：2006年11月18日13:30～17:30、場所：京都大学大学院文学研究科新館第7講義室、参加人数：約60(3)、主な招待講演者：楊聡(上海第二工業大学日本語研究所教授)、金文吉(釜山外国語大学校東洋語大学教授)

2. 教育活動実績【公表】

博士課程等若手研究者の人材育成プログラムなど特色ある教育取組等についての、各取組の対象（選抜するものであればその方法を含む）、実施時期、具体的内容

1) 若手研究者の海外派遣

平成14年以降、18年度までの5年間、若手研究者による海外学会での報告を積極的に支援することを事業の柱の1つとした。本人の申請を基礎に、本プログラムCOE実施委員会が審査、承認することで派遣を行った。以下にその手続きを経た学会報告のための派遣事例を記す。

平成14年度

水野友晴、平成15年3月5日～3月11日、cross currents: New Intersections in Comparative Philosophy（アメリカ合衆国）

平成17年度

白石竜彦、平成17年8月19日～9月1日、第4回国際ダルマキールティ学会（オーストリア共和国）

平成18年度

永井佳代、平成18年4月20日～4月25日、アメリカ先住民言語に関するワークショップ（アメリカ）

シモン・グジェラック、平成18年7月21日～7月27日、韓国言語学会（大韓民国）

佐野勝彦、平成18年8月10日～8月17日、Logic in Computer Science 2006（カナダ）

大崎紀子、平成18年8月16日～8月21日、第13回トルコ言語国際学会（スウェーデン）

山口育人、平成18年9月25日～10月1日、第5回日英歴史家会議

以上の海外学会における報告とは別に、若手研究者が海外で行う資料調査・フィールド調査についても審査の上支援を行った。件数は平成14年度：24名、平成15年度：16人、平成16年度：17人、平成17年度：7人、平成18年：21人であった。

2) 外国語論文指導

大学院博士課程学生が外国語で論文を発表する機会を拡大するため、論文指導を強化した。その結果、欧文学術誌Humaniora Kiotoensiaに若手研究者による論文10篇を掲載するなどの成果をえた。ほかにも、以下の専門学術誌への論文発表を支援した。

箱田恵子「清朝駐外使館的設立——以考慮清朝決策派遣駐外使節的過程及其目的為中心——」

掲載誌：台湾師大歴史学報 第33期（2005年6月）

（原題）「清朝在外公館の設立について——常駐使節派遣の決定とその意味を中心に——」

『史林』第86巻第2号（2003年3月）

保科季子「天子好述 ——漢代儒教式皇后論——」

掲載誌：『中国経学』誌に投稿中

（原題）「天子の好述 ——漢代の儒教的皇后論——」『東洋史研究』61-2、2002年

岩尾一史"On the Old Tibetan khri-sde"

掲載誌：Journal of Studies in Central Eurasian Philology and History ,no.1,2007

（原題）「吐蕃の万戸（khri sde）について」『日本西藏学会々報』第50号、2004年

3)平成18年度には大学院博士課程学生が中心となってプランを練る研究会を以下のとおり実施した。一線の研究者を学外から招くにあたって博士課程院生が準備のプランを練り、論題の選択などを行った。個々の院生の研究をより直接的に刺激し、向上させるという趣旨であった。

●生物学の哲学と心の哲学の接点

日時：2006年11月18日（日）14：00～18：00 場所：COE研究室

オーガナイザー・司会：大塚淳（博士課程）

研究会企画：生物学の哲学研究会（哲学専修・科学哲学科学史専修大学院生）

報告：戸田山和久（名古屋大学教授）、太田紘史（修士課程）、中尾央（修士課程）

●結局「意義」とはいったい何なのか—ダメット版フレーゲの再検討

日時：2007年1月13日（土）14：00～18：00 場所：COE研究室

オーガナイザー・司会：大西琢郎（博士課程）

報告：金子洋之（専修大学教授）、松坂陽一（首都大学東京助教授）、藤川直也（博士課程）

21世紀COEプログラム委員会における事後評価結果

(総括評価)

設定された目的は概ね達成され、期待どおりの成果があった

(コメント)

本プログラムの研究教育拠点形成計画全体については、概ね達成されたと判断する。

人材育成面では、若手研究者の外国語論文発表支援などにより、ほぼ期待どおりの成果が得られたと評価できる。ただし、学外からの研究員採用がきわめて少なかった点が残念である。

研究活動面では、ある程度の成果が得られたが、十分期待に応えたものだと言うことはできない。本プログラムの成果として大量の報告書が出され、数多くの会議やシンポジウムが開催されたことは、事業推進担当者たちのイニシアティブの下で、精力的な活動がなされたことを示すものと評価できる。また、個別研究の中には世界的水準とも言うべき優れたものが含まれている。しかしながら、中間評価結果の「日本語の啓蒙書や報告書を大量に出すことよりも、国際的に評価される質の高い研究成果を、欧文の論文や書物として出すことに精力を注ぐべきである」というコメントに対して、効果的な対応が取られたとは言えない。

また、グローバル化する現代世界が直面する一元化と多元性の相克という問題を解明する作業を通じて得た学知がどのようなものであるのか、それが調和ある多様性の実現という現代的課題に対していかなる貢献をなしうるのかは示されておらず、歴史学、哲学、文学を統合した国際的なインパクトをもつ人文学知の形成という所期の目的が達成されたと判断することはできない。報告書は、個別論文の集成といった性格が強く、各執筆者が本プログラムの問題意識と目的をどこまで共有していたのかという点についても疑問が残る。

補助事業終了後の持続的な展開については、これらの諸点を踏まえ、一層の努力がなされることを期待したい。